
あやかし百景

ぱるす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あやかし百景

【Nコード】

N7729K

【作者名】

ぱるす

【あらすじ】

社員全員が妖怪の探偵事務所。ただ一人の人間である主人公は、そこで様々な事件に遭遇する。

The Ripper

鼻から牛乳を垂らしてる子泣き爺を見て、俺の方が派手に牛乳を噴き出しちまった。

爺の頭を思いっきりハリセンで叩く。
スパーン！ という乾いた音が響く。
なかなか良い感触だ。

今回、子泣き爺と組むことになった時、所長がくれたのだ。
わかってるなあ、所長。

紹介が遅れたが、俺の名前は桐島浩介。

こんなところで妖怪ジジイと一緒にになってアンパン＆白牛乳を頬張ってはいるが、歴とした人間だ。

二十六歳、男子、霧島探偵事務所の新入社員だ。

妙な巡り合わせで、就職氷河期を遭難していた俺を拾ってくれたのが、ここの所長。

霧島と桐島、似ているがまったく関係ない。というか所長も妖怪だ。

とにかく今は張り込み中なので、詳しい話はまたいずれ。

「おいコースケ！ 痛いぢやないか！」

頭をさすりながらこつちを睨んでいる。妖怪が一丁前の口を叩きやがる。

「俺だつて鼻が痛えよ！ 静かにしてろって言ってるのに音たてんなよ！」

「お前がハリセンで叩いたんぢやろうが。まったく……呆れるほど自分勝手なヤツぢや」

爺は文句を言いながら牛乳を飲んで——いるそばから、また垂ら

始めたよこの馬鹿は。

スパーン！

「お前、それどーなってんだよ？ 鼻栓でもしておけよ！」

爺は目を白黒させながら反論しようとするが、俺は慌ててその口を押さえた。

「しっ！ ヤツが戻ってきたぞ！」

通りを挟んだ向かいの雑居ビルに、男女のカップルが入ろうとしていた。

男の方は背が高く、黒いトレンチコートを着ている。俺たちが追っているヤツだ。

このところ頻発している、女性が惨殺されて臓器が抜き取られる連続殺人事件。

その犯人だ。

「クラスBぢやぞ。応援を呼んだ方が良くないか？」

カウンターを見ながら爺が言う。

「爺さん、妖怪のクセにビビッてんのかよ」

グロツクのマガジンを確認しながら俺は答える。

コイツは普通の電動ガンだが、弾は普通じゃない。滑面加工されたBB弾の一発一発に、特殊な縛印が刻まれている特注品だ。妖怪連中にとっちゃ痛いじゃあ済まない、恐ろしいオモチャってわけ。

銃を腰に挿すと、俺はビルに向かった。ちょっと遅れて爺がついて来る。

「おい爺さん、俺は下から階段で行くから、エレベーターで上がって下りてきてくれよ」

ヤツのねぐらは四階、このビルは八階建てだ。

「挟み撃ちってわけぢやな。心得た！ ぢゃが武器無しでクラスB

とは戦えんぞ？」

面倒くさい爺だ。自分の武器くらい自分で用意しておけと思ったが、黙ってハリセンを渡してやると、満面の笑みでスキップしながら駆け出していった。

頭はちよつと弱いが元気なお年寄りだったな……。

俺は両手を合わせると、おもむろに階段を上り始めた。

ヤツはいつも人気の無い雑居ビルを見つけては女性を誘い込み、そこで「食事」をする。

警察は血眼になって追っているが、おそらく捕まえることは出来ないだろう。

何故なら、普通の人間に妖怪を捕まえることなど不可能だからだ。気配を感じられないよう慎重に歩きながら、所長の言葉を思い出す。

「妖怪とは本来、秩序を守る生き物なのよ。でも最近は無法なことを仕出かす輩も多いの。そういった連中を取り締まって、秩序を維持するのが私達の仕事なのよ」

まあ何の因果か、人間である俺がこんな仕事をしているわけだが……。

そんな事を考えながら四階のドアの前に立つ。

俺ひとりだ。

爺さん、何やってんだ？

到着を待とうと思ったが、どうやらそんな暇は無さそうだ。部屋の中から女の悲鳴が聞こえてきたからな。

思いつきりドアを蹴っ飛ばす。

蹴っ飛ばした反動で、思いつきり転んでしまった。尻をしこたま打ち付ける。

ドアって意外に頑丈だという発見に驚いている場合ではない。

「このお！ 開け！」

ヤケクソになって何度も蹴っていると、ようやく壊れて扉が開いた。格好悪いが四の五の言ってられない。

中に入ると女が倒れているのが見えた。床に黒い水溜りが出来ている。

「くそ！ 遅かったか……」

——瞬間、背筋に冷たいものを感じて俺は伏せた。直後、首の後ろで空気を切り裂くような音がする。

「チッ！ 勘のいいヤツ！」

振り向くとヤツが立っていた。手にはデカイ刃物のようなモノを持っている。というか手が刃物だ。

「まあな！ 勘だけはいいんだ、俺は！」

雰囲気飲まれないように、とりあえず言い返しておく。

「そんなモン振り回したって俺には当たらないぜ？」

こちらら生身の人間が妖怪を相手にしようってんだ。口喧嘩で負けてたら勝負にならない。

俺はヤツを睨みつけたまま腰に手をのばす——が、無い？

ヤバイ！ 銃が無い！

ふいに、ヤツの影がゆらめく。

反射的に横っ飛びをした俺の視界の端に、ギラリと光る刃物が映る。

ガキン！ という金属音。

振り返ると、刃渡り一メートルはあるつかという化物ナイフが壁に刺さっていた。

「見えているのか。お前、本当に人間か？」

「当たり前じゃねえか。そんなへなちよこチョップじゃ俺は倒せないぜ？」

いやまったく、今のは正直かなり危なかった。この状況で軽口を叩ける自分に驚いているくらいだ。

それにしても、銃はどこで落とした？ さつき尻餅をついた時か？
辺りを見回すが落ちていないようだ。ならば部屋の外か。

ヤツはこっちを睨みながら次の攻撃を迷っているようだ。
やるなら今しかない。

俺は思いつきり奇声を上げると、入口に向かって猛然とダッシュした。

あと少し、三步、二歩——というところで、急に目の前が暗くな
った。

いや、暗くなったのではない。黒いコートだ。目の前にヤツが回
り込んだのだ。

ゆっくり見上げると、恐ろしく残忍な笑い顔があった。

「ハッターはそこまでだな、人間」
ヤバイ、死んだ。

——と思った瞬間、ヤツの巨軀が急に縮んだ。
縮んだというか、床にめり込んだ。

「コースケ！ 無事か？」
子泣き爺だった。ヤツの背中にちゃんと乗っている。

「遅えよ！ このバカ！」
憎まれ口を叩いてみたが、悔しいほど完璧なタイミングだ。俺が
女だったら惚れてたかもしれん。

「いやぁエレベーターのな、八階のボタンに手が届かなくてな、仕
方ないので階段で来たんぢやよ」

言ってることは間が抜けているが、爺に乗っかられたヤツはあま
りの重量に身動き出来ないまま、メリメリと床に沈みこんでいく。
恐ろしい高齢者だ。

銃を拾って腰に挿すと、立ち上がって俺は言った。
「何か言い残すことはあるか？ ジャック」

苦しそうな表情でヤツが答える。

「見下ろしてんじゃねえよ、人間ごときが」

「ああ、そうかい」

俺はポケットから札を出すと、ヤツの額に貼りつけた。

「それじゃあ、百年ばかり眠っててくれや」

短い悲鳴と共に閃光が辺りを包む。

再び闇が戻った時、ヤツの身体は消え、爺だけがちょこんと床に座っていた。

「助かったぢやろ？」

帰り道、歩きながらしきりに人の顔を覗き込んでくる。いやらしい年寄りだ。

無視しているのだが、しつこく言い寄ってくる。

「ワシのありがたみがわかったというものぢやな。そういう意味では、いい事件ぢやった」

「俺がヤツの気を引いてたから成功したんだろ」

「ほほお。殺されそうになってたくせに、減らず口だけは大したモンぢやのう」

悔しいが言い返せない。いやらしい年寄りだ。

ふと、携帯に着信があつたのに気づいた。

「あれ？ 所長からだ……」

「響子ちゃんから？」

「爺さん、所長のこと名前で呼ぶなよ」

言いながら俺は事務所に電話をかける。しかし、繋がらない。

おかしいな？ この時間ならまだ誰かいると思うんだが……。

もう一度かけ直してみるが、やはり繋がらない。

電話を切つて爺と顔を見合わせる。

「何かあつたのかもしれない」

「とりあえず事務所に戻ってみようぜ」

俺たちは不安な気持ちのまま、事務所への道を急ぐのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7729k/>

あやかし百景

2010年10月9日18時35分発行